食事を終えた後、リアムがノアをリビングのソファに座らせて離席し、ネックとノラらは床に座って自分達のこさやアが床に敷きの上に座布団を設置していた。
ノラらは胡坐をかいて、両足首を掴み膝を浮かせては床につけるのを繰り返している。ネックは両脚を前方に投げ出して、倒れないように両手を身体の後ろについている。
「アリーニに来て四年くらいになるけど、人が流れ着いたのは初めてだよな」
「俺らいつも同じ海岸で漂着物を拾ったり魚を獲ったりしてるから、海の変化がおるとか分るんだよ」
三人のもてなしの甲斐もあり、ノアは緊張のあまりはそれて表情が柔らかいものとなったようだった。ソファの背もたれに寄りかかり、クッションをぎゅっと抱きかかえている。
「ノアは自分の名前以外には何も思い出せねえんだよな？」
「うん」
ノアは起きたての時と比べ異なり、受け答えの声もハッキリしている。
ノラらは胡坐の姿勢を両手を身体の後ろについて、
「何かかっこも思い出せないのか？」
と、聞いてみるがノアが「うーん」とクッションを更にぎゅっと強く抱きかかえる。ネックは床についていた両手を離して片方の膝を立て、その膝の上に腕を置いて助け舟を出す。
「見たものとか、聞いたこととか」
「見たもの、聞いたこと……」
ネックの言葉を反芻した後、ノアは下を向いてしばらく黙り込んだ。
十秒、二十秒、三十秒――静寂が続く。
「……お茶、淹れる私」
キッチンから戻ってきたリアムがソファ前のローテーブルに置いたカップにお茶を注いでいく。
その様子をリアムは以外の三人が見守っていた。
最後の一滴がカップの中へ落ち、ぽちゃんと音を立てて波紋になった。
ゆらゆらと揺れる お茶を見つめていたノアが口を開いた。
「水……海……」
ノアの中で薄い カーテンのように記憶の光景が揺らいでいく。
「光が……」
「光？」
目を開じ、薄ぼんやりとした記憶を辿っていくが、それ以外の光景が浮かびず、
「思い出せない……」
と首を振った。
「そうか。ありがとな、ノア」
海の中で漂れていたのは間違いないなんで、それ以上の手がかりは掴めそうにない。
「記憶喪失、か」
ネックは床に手をついて、ちらりとリアムを見た。
リアムは心配そうにノアを見つめている。
現段階の ノアは心細そうに膝を抱まている。
記憶をなくした漂着少女。
何も思い出せないまま、見知らぬ家にひとりぼっち……。
どんな事情であれ、このまま にしておけないのはノラやリアムも同じ気持ちだろう。
「ノア、こういうのはどうだ？」
ノラが思いついて手のひらを自の前に差し出し、小さな火の玉を浮かべた。
「こんな風にできるか？」
「……？」
自分の手のひらを不思議そうに見つめるノアへネックが補足による。
「魔法を使えるのは異血、魔法が使えないのは純血。その間に生まれた子供は混血って呼ばれてるんだ」
「いけつとじゃんけつ？」
ノアは言われていることが飲み込めず首を傾げた。
「ノラ、そういうのはやめとけ？」
ノラが思いついて手のひらを向けるノアの手から火が出ることはない。
ノラは手のひらの上に あった火を消し、
「ダメだ、分からんね」
腕を組んで首を傾げる。
血種を特定したとしても、ノアがどこから来て、何者なのか分からなければどうすることもできない。
少しでもヒントがあれば、元の家に帰せるんだけど」
ノラが切って首の後ろを掻いた。
みんなが自分のために試行錯誤して悩んでいることはノアにも分かった。
「ごめんな」
ノアの目を覗 きこんだ。
「ノアが気にすることはないさ。今は頭 中にある記憶の出口が詰まっている状態なんだと。その人の状態やきっかけ次第だけど、、元に思い出すことも あれば、少しずつ思い出していくこともあるらしい」
「きっかけ……」
ノアの中 に様々 ネックが続ける。
「さっき、飲み物から海を連想したろ？ あんな風に視覚と 嗅覚を刺激することで記憶が呼び起こされることもあるんだよ」
「記憶が呼び起こされる……」
ノアのオウム返しのようなやり取りにネックは静かに頷く。
「よっしゃ、それなら俺たちでノアを手伝おうぜ！」
ノラが立ち上がって みせた、しかしネックが「ただ……」と神妙な表情を浮かべる。
「思い出せることが楽しいことや良いことばかりとは いかないもんだ。残酷なものや悲惨なのも。もしかしたら思い出さないほうが良かったなんてこともあるかもしれない」
リアムとノラらはただ黙って頷いた。
ネックがノアの目を見た。真っ直ぐ本金に不揃 く確だ。
「ノア、俺たちがノアの記憶を取り戻す手伝いをするとしても、ノア自身が記憶を取り戻したいと思 ノア自身が記憶を取り戻したいと思えるぐ意味がない。俺達でも、知らない誰かをもなくて、今のノアの気持ちが一番大事なんだ」
「少々私の気持ち……？」
ニコ 目 ノアは静かに手元のカップを見た。何度見ても先ほどと同じ光景 が思い浮かばない。
まだ何も分からない。自分自身の本当の気持ちを。
その中でひとつだけ、心がざわざわしているのをノアは感じていた。
分からないと言ってしまうことは簡単だったが、それは逃げでしかないけな。
分からないからこそ知りたかった。
「私、自分のこと知りたい」
ノアの力強い言葉にネックが、
「決まりだな」
と笑ってみせた。
「ノア、早速で悪いんだけど、明日 俺たち『マーマレ・ブラック』って街に行こうと思ってるんだ。ノ ア も一緒に行かないか？」
「『マーマレ・ブラック』？」
「そう、いつも俺たちが漂着物とか食料を売りに行ってる街なんだけど、そこに漂着物を研究してる知り合いがいるんだ」
「ああ！ いたなそう言えば！」
「そこでノアの着て た服を見てもらったら何かなるかもしれないと思ってさ」
先ほどまで神妙な顔つきだった ネックが、穏やかな表情でこちらを見ている。
「どうかな」
「うん……」
見ず知らずの自分にここまで優しくしてくもらうことに、ノアの心中では感謝の気持ちと申し訳ない気持ちが同居していた。
ノアの前にリアムが優しく触れて頭笑んだ。
「ノア、遠慮しなくていいだろ。せっかく頼まって出会ったんだし」
「そうそう、俺たち同じ釜の飯を食った仲だし」
ノラもウインクをしている。
自分が一体何者で、どこから来たのか、それを知ることが怖くないわけではなかった。
しかし、目の前の三人が自分以上に力になろうとしてくれている。
ノアは三人の顔を見つめた後、ぎゅっと胸に手を当てた。
「……一緒に行っていいかな？」